



「へっ……アハハ……」

セリカ・フロントは絶体絶命の危機にあった。
人類に敵対的な寄生生物、インフエスタ。
その襲撃に遭い、彼女はその巢の中で四肢を拘束されてしまった。



「一体私をどうするつもりなの？」

インフエスターが人間に寄生して怪物化させる事例はある。
しかし生け捕りたてで巣を連れ去るなどという
行動は聞いた事がない。

焦る彼女はよりやぐ自身の身体に起きている異常を察しを
へ。

「……………ん、ん、ん………」
「……………ん、ん、ん………」



「……待って……そんな……」

意識を取り戻したセリカの元へ新たな形状の触手が接近する。
そしてそれは彼女の秘所目掛けて……。



「あっ……がっ……うっ……」
「うっ……嘘……これ……スーツ……うっ……」

セリカが身に纏うスーツは丈夫で伸縮性に優れた特殊な物だ。
だがそれが仇となり、スーツごと膣内へと侵入してくる
触手を防ぐことができない。
彼女は当然苦痛と嫌悪感で悲鳴を上げるが……。

「はぁ……はぁ……あぁっ……」

セリカが絶頂すると同時に、触手が彼女の身体に
体液を注入する。

「ス、スーツが侵食されて……」

「ふ……これっなんぞっ 気持ちさらさのお……っ」

侵食された部位は粘膜となって肌と一体化し、敏感な性感帯
となったかのような快感をセリカに与える。

インフエスターEによる責めは当然これだけで終わるんじゃないわ……。





「は……は……は……♡ あ……あ……♡」

数時間後、そこには幾度となく絶頂を味わい、ついにはスーツの殆どを侵食されたセリカの姿があった。

もはやその身体に与えられる快楽は尋常なものではなく。

焦点の合わない瞳で絶頂を繰り返す彼女は、インフエスターは……を刺すべく触手を這わせよう……。



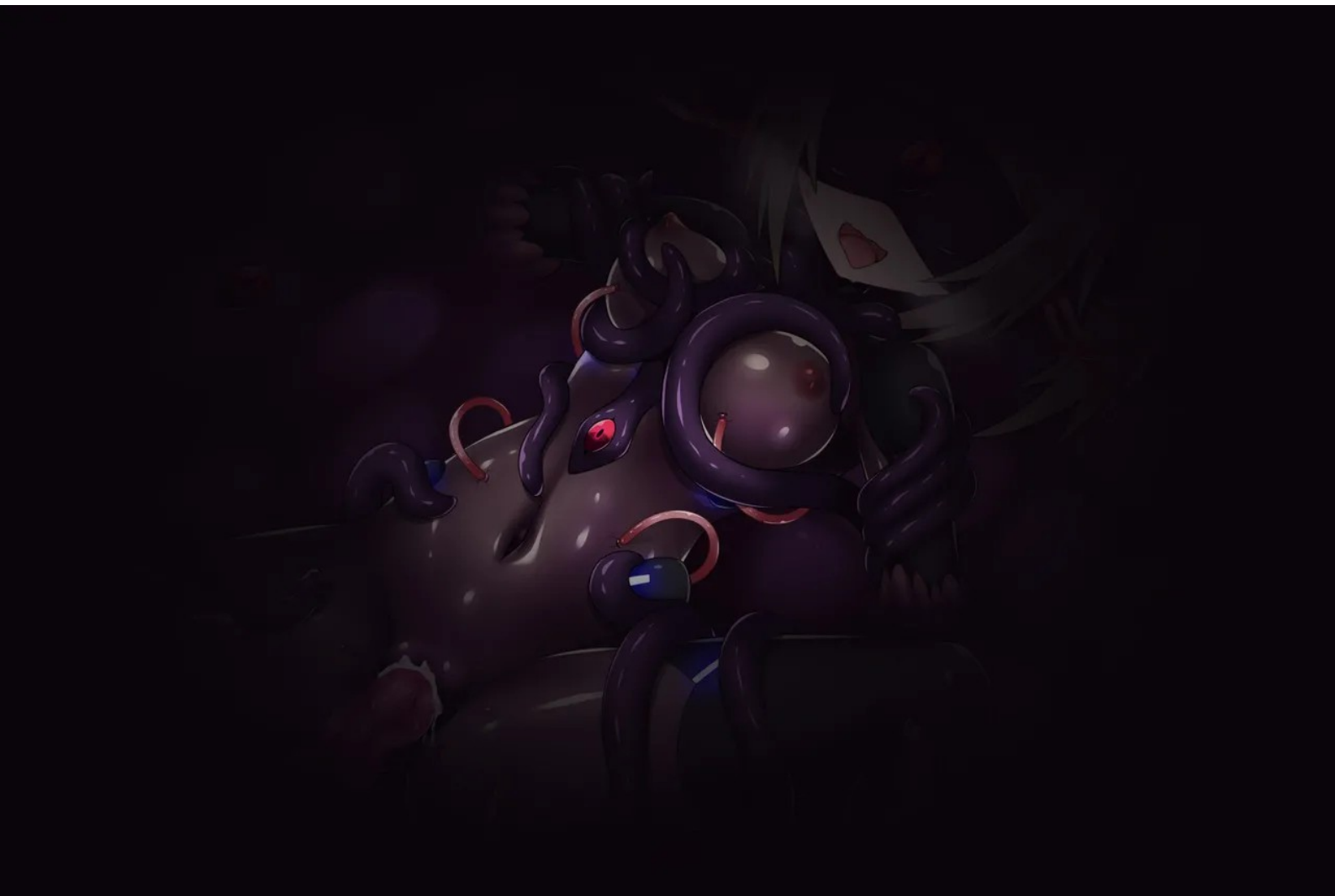
「ああああああああ♡
イクッ♡イクッ♡

もっ♡もっ♡

だが今のセリカはそれに恐怖を覚えることも、
拒絶することも無い。
ただ与えられる快樂に身を委ね、主となる存在を
受け入れていく。

「……私じゃ無い♡
私が……私じゃ無い♡」

「♡♡♡♡



生まれ変わったセリカが目を覚ます。
スーツを侵食し、寄生し、もはや彼女の身体と一体化した
インフェスターが再び彼女の耳へと触手を侵入させる。

「ん……ふふ……おはようございます、ご主人様」



「ああ……伝わってきます……」

「頭の中に、ご主人様の意思が……」

インフェスターは発声器官を持たないが、その道具として生まれ変わったセリカは触手を通して脳内で直接その意思を感じ取ることが出来た。

「はい……私はご主人様に洗脳して頂き、ご主人様の奴隷へと生まれ変わることが出来ました……」
「それで……その……ご主人様……♡」



そしてセリカと繋がったインフエスターもまた、彼女の望みに応えるべく触手をその秘裂へと伸ばし……。

人間の身体では味わえなかった強烈な快感がセリカを貫く。今の彼女の頭の中にあるのは快楽、そして主への愛と忠誠心だけだった。

「んいいい♡ ご主人様がつ♡ 挿入ってっ♡」

「ご主人様っ お願いしますっ♡ 奥にっ♡ 子宮にっ♡」





触手から放たれた体液がセリカの子宮を満たしていく。
そして彼女の下部、子宮の位置にハートのような紋様が
浮かび上がる。

「♡♡♡♡」

セリカの脳内にある愛情や快楽のイメージを元にした、
インフエスターの所有物である事を誇示する墮落の証だ。

「はーっ…………… はーっ……………♡」

「ああ……………これがご主人様の所有物である証……………」
「素敵です……………♡」

「はい……………もっとご主人様の奴隷を……………」

「ふふっ……………すやうじゆいんが居ます♡」

「待っててね……………あなたもご主人様のモノだ……………♡」

























